

指標

今後の医師確保に向けて

副会長
深澤 雅則

はじめに

道内の医療機関においては、いまだに医師の不足が続いている。とりわけ地方の市町村において顕著で、札幌市を含む道央圏に道内医師の半数以上が集中し、医師偏在が顕著である。地方の医療機関では医師の高齢化とともに退職した医師の補充が困難で、地域人口の減少とともに、診療所を含めた医療機関の減少が続いている。

わが国としてはOECD諸国と比較して医師の絶対数が不足していたため、2008年の閣議決定により、それまでの医師数抑制策を増加する方向に転換し、現在医学部の入学定員は1,600人以上の増員となっている。

しかし、今後は人口減少が確実であり、医師数の増加は暫定措置として平成31年まで認めることとしているが、その後は状況により医師数を減少させることが予想される。

1. 医師数の増加

2008年の閣議決定以降、各大学の医学部入学定員を増加させ、平成28年の医師国家試験受験生9,434人のうち合格者は8,630人となっている。そのうち女性は32.8%で、平成12年からはずっと30%代が続いている（表1）。欧米諸国の数値から女性の医学部入学者はすぐ40%を越えるものと考えていたが、予想よりは増えていない。それでも今後は3人に1人が女性医師の時代である。女性医師が活躍できる体制をととのえることが医師確保の面でも重要である。

道内の医師数は平成26年12月末での医療施設従事者12,431人、人口10万対230.2人、全国平均233.6人と比べやや少ないものの、極端な不足ではない。北海道は広域で診療効率の悪さと道央圏への一極集中が、過度の不足感をいだかせている（図1）。

女性医師は年々増加しており、医療施設従事者

12,431人のうち1,803人、14.5%となっており、全国の女性医師の占める割合20.4%と比べるとまだ少ないが、今後は確実に増加してくると予想される（表2）。

道内3大学では医学部の定員100人だったものが、平成20年以降増員し、現在は北大112人、札幌医大110人、旭川医大122人と毎年合計44人の増員となっている。道内に一定期間勤務することになっている地域枠医師数が145人となり、札幌医大を卒業した地域枠医師の第一期生7人が平成28年度から地域での勤務を開始している。医師数全体の増加と地域枠医師が今後増えてくることで、道内各地の医療に少しずつ希望が持てる状況となってきた（表3）。

2. 北海道の取り組み

北海道の医師不足により地域医療の崩壊が危惧され、知事を会長とした「北海道医療対策協議会（医対協）」が平成19年から設置され具体策の検討が重ねられてきている。

表1 医師国家試験合格者数の推移（全国）

年	(回)	受験者数	合格率	合格者数（性別肉訳）				
				男性	比率	女性	比率	
平成10年	92	8,716	89.6%	7,806	5,805	74.4%	2,001	25.6%
平成11年	93	8,692	84.1%	7,309	5,139	70.3%	2,170	29.7%
平成12年	94	8,934	79.1%	7,065	4,905	69.4%	2,160	30.6%
平成13年	95	9,266	90.4%	8,374	5,715	68.2%	2,659	31.8%
平成14年	96	8,719	90.4%	7,881	5,457	69.2%	2,424	30.8%
平成15年	97	8,551	90.3%	7,721	5,114	66.2%	2,607	33.8%
平成16年	98	8,439	88.4%	7,457	4,935	66.2%	2,522	33.8%
平成17年	99	8,495	89.1%	7,568	5,019	66.3%	2,549	33.7%
平成18年	100	8,602	90.0%	7,742	5,213	67.3%	2,529	32.7%
平成19年	101	8,573	87.9%	7,535	5,022	66.6%	2,513	33.4%
平成20年	102	8,535	90.6%	7,733	5,067	65.5%	2,666	34.5%
平成21年	103	8,428	91.0%	7,668	5,046	65.8%	2,622	34.2%
平成22年	104	8,447	89.2%	7,538	5,039	66.8%	2,499	33.2%
平成23年	105	8,611	89.3%	7,686	5,187	67.5%	2,499	32.5%
平成24年	106	8,521	90.2%	7,688	5,247	68.2%	2,441	31.8%
平成25年	107	8,569	89.8%	7,696	5,180	67.3%	2,516	32.7%
平成26年	108	8,632	90.6%	7,820	5,337	68.2%	2,483	31.8%
平成27年	109	9,057	91.2%	8,258	5,655	68.5%	2,603	31.5%
平成28年	110	9,434	91.5%	8,630	5,802	67.2%	2,828	32.8%

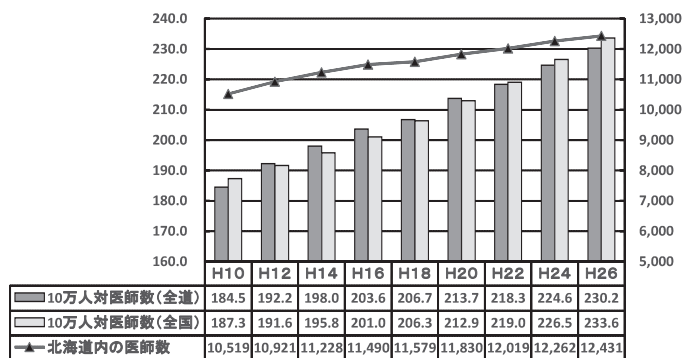


図1 医療施設（病院・診療所）に従事する医師数の推移（平成10年～平成26年）

- 1) 医育大学の入学定員増
国の緊急医師確保対策等により平成20年度から22年度にかけ、医学部入学定員が計44人増員している。
- 2) 地域枠制度
道は平成20年度から北海道医師養成確保修学資金制度を創設し、平成27年度には札幌医大90人、旭川医大55人の145人が地域枠で入学している。
- 3) 自治医科大学卒業医師
自治医科大学卒業後、道職員として採用し、一定期間地域の医療機関に派遣して勤務してもらう制度で、平成27年は15人である。
- 4) 北海道地域医療振興財団
財団に求人登録した医療機関に対して、財団のドクターバンクから医師を紹介、斡旋している。平成27年度の登録医師125人であり、紹介成立数は15人であった。そのほか財団では熟練ドクターバンクや短期間の医師派遣事業も行っている。
- 5) 地域医療支援センター
医師不足が深刻な市町村立病院などに医育大学に設置する地域医療支援センターから所属医師を派遣する制度で、平成27年度は北大6人、札幌医大11人、旭川医大5人の派遣であった。

6) 緊急臨時的医師派遣事業

都市部の医療機関から医師不足が深刻な地域の医療機関に対して、北海道医師会、北海道病院協会などの協力を得て、緊急に医師を派遣する制度で、平成27年度は派遣日数として延べ2,853日となっている。

このほかにも北海道および関連機関の対策はいくつもあるが、各医療機関に当てはまるものがあれば、ぜひ検討してほしい。

3. 女性医師支援と確保対策

医科大学入学者の1/3は女性になっている現状から、医師確保対策としては女性医師の活躍に期待するものが大きくなってきている。

北海道医師会としても女性医師支援のためにさまざまな事業を行ってきている。北海道医報1158号(2015年3月)に詳細が記載されているので参考にさせていただきたい。女性医師支援相談窓口の相談件数は年々増加し、平成23年6月15日の開設以降、平成28年10月31日までの間に379件に達している(図2)。女性の場合、自身の出産、育児のため休業することはやむを得ないが、休職期間を可能であれば1年間丸々休むのではなく、できるだけ短く、状況が許せばパートタイマー的な働きでも仕事を継続することで、実務的にも、モチベーションも下がらないで済むと思う。働く上では医療機関に院内保育所を望む

表2 女性医師の状況(平成26年末)

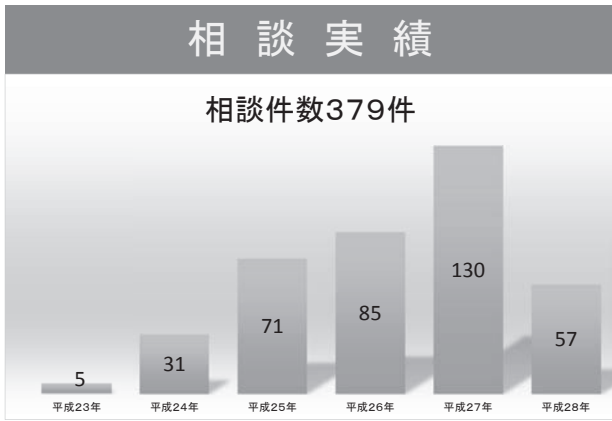
(単位:人)

区分	H10	H12	H14	H16	H18	H20	H22	H24	H26
全 国	236,933	243,201	249,574	256,668	263,540	271,897	280,431	288,850	296,845
男	203,910	208,353	210,764	214,628	218,318	222,784	227,429	232,161	236,350
女	33,023	34,848	38,810	42,040	45,222	49,113	53,002	56,689	60,495
女性比	13.9%	14.3%	15.6%	16.4%	17.2%	18.1%	18.9%	19.6%	20.4%
全 道	10,519	10,921	11,228	11,490	11,579	11,830	12,019	12,262	12,431
男	9,440	9,775	9,948	10,113	10,138	10,297	10,386	10,542	10,628
女	1,079	1,146	1,280	1,377	1,441	1,533	1,633	1,720	1,803
女性比	10.3%	10.5%	11.4%	12.0%	12.4%	13.0%	13.6%	14.0%	14.5%

表3 地域枠・貸付定員等の推移

(単位:人)

区 分	～H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27～
札幌医大	100	105	110	110	110	110	110	110	110
地域枠	20	30	35	35	35	35	50	70	90
貸付枠	-	10	15	15	15	15	15	15	15
旭川医大	100	100	112	122	122	122	122	122	122
地域枠	-	15	50	55	55	55	55	55	55
貸付枠	-	-	7	17	17	17	17	17	17
北 大	100	100	105	112	112	112	112	112	112
地域枠	-	-	-	-	-	-	-	-	-
貸付枠	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	300	305	327	344	344	344	344	344	344
地域枠	20	45	85	90	90	90	105	125	145
貸付枠	-	10	22	32	32	32	32	32	32



(平成23年6月15日開設以降平成28年10月31日現在)

図2 北海道医師会女性医師等支援相談窓口の実績

声が非常に多い。さらに病児保育も可能であれば設置してほしいとの希望も多々ある。

医療施設に女性医師は平成26年度で1,803人が従事している。札幌市に60.6%が集中、札幌市、旭川市、函館市の道内3大都市に77.2%が集中している。診療科においても皮膚科、眼科、麻酔科、小児科、産婦人科を選択することが多く、男性医師より診療科の偏在が顕著である(図3)。

今年の日医総研のアンケートで若手医師の診療科選択プロセスに関する調査では、医局の雰囲気、人間関係の良さを挙げる割合が多く、女性医師の場合、結婚や子育てとの両立がしやすいことを重視する傾向が見られた。ワークライフバランスを実現しやすいような対策が大事で、女性医師の活躍の場を広げることこそが、医師の偏在問題を解消する鍵と強調している。

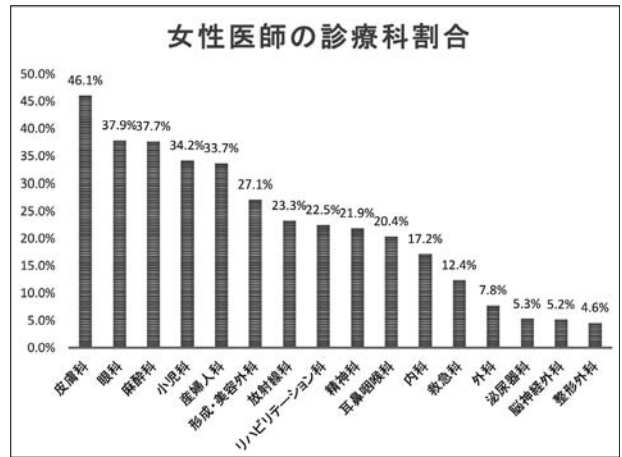


図3 女性医師の診療科割合

まとめ

北海道における僻地医療は何十年経過しても本質的には改善しておらず、各自治体は未だに医師不足に悩まされている。

そのような中で国も道も医師不足問題にさまざまな対策を講じており、効果を上げている施策も種々あるが、根本の解決にはまだ道のりは遠いものと感じられる。

各医療機関は、女性医師を含めた勤務医の勤務環境の改善を、極端な医師不足地域には今回示した国や北海道の医師確保対策事業なども最大限活用していただきたいと思っている。女性医師も長期に休業することなく仕事を継続することで、医師としての知識や技術を高め、地域医療にも貢献してくれることを期待している。

平成28年秋の叙勲・褒章受章者(北海道医師会員)

先般、平成28年秋の叙勲・褒章受章者が発表され、当会会員で以下の方々が叙勲の栄誉に浴されました。ここに受章者の方々のご功績をたたえ、謹んでご芳名を掲載させていただきます(敬称略)。

受章者各位には、心からお祝いを申し上げます。

◇旭日双光章

須貝 基信 元(社)滝川市医師会理事
保健衛生功労

◇瑞宝中綬章

石井 清一 札幌医科大学名誉教授
教育研究功労

◇瑞宝小綬章

前田 喜晴 元 伊達赤十字病院長
保健衛生功労

◇瑞宝双光章

高下 泰三 現 学校医
学校保健功労

◇瑞宝双光章

山敷 宏平 元 学校医
学校保健功労